

「生きたことば」の主体的使い手としてのプロフィシエンシー

—日本語継承語話者(JHL)のことばの使用から見えるもの—

松田真希子（金沢大学）

キーワード：オーセンティシティ、OPI、継承語話者、自閉症スペクトラム障害、主体的言語使用者

1. はじめに

プロフィシエンシーを構成する概念の一つにオーセンティシティ（真正性）がある。筆者はオーセンティシティとはその言語使用者が、どれだけそのことばを自分の文脈の中にとりこみ、主体的・選択的に「生きたことば」として使えているかを指すと考える。あることばのプロフィシエンシーが高いということは、タスクの遂行能力やインテリジェンスの高さだけでなく、オーセンティシティが高い言語の使用者ということが含まれると考える。同時に、主体的言語使用とは、単独で存在するものではなく関係性の中に宿るために、オーセンティシティとは相手との関係性に応じたふさわしさを主体的に選択できていることも意味する。

そして、そのオーセンティシティを日本語において考える際、決して「日本生まれ、日本育ち」の日本語話者の日本語だけがオーセンティックな日本語ではなく、世界には言語背景の多様な日本語使用者たちによって相互承認されている、様々なオーセンティックな日本語があると考えられる。

その中の一つに継承語としての日本語使用者(Japanese as a Heritage Language=JHL)の日本語が位置づけられる。継承語とは「家族や親族によって使用され、家庭領域でその子どもに向かって話しかけられていることばが、居住している社会の言語とは異なっている場合」の言語である。代表的な継承語としての日本語使用者として、日本人の両親を持つ海外駐在の帰国子女、海外国際結婚家庭の子弟、南米や北米の日系移民などがあげられる。

松田(2018)は継承語話者の日本語使用の分析から、JFLの日本語超絶話者はJHLに比べ、職業領域における知的な日本語力（論理的で専門的な内容を扱う日本語力）やフォーマルなスピーチスタイルには優れているが、関係性に応じた分人のバリエーションが限定的である。一方、JHLの日本語複言語話者は論理的な内容を扱う日本語力は低いことが多いが、私的領域における分人感覚が発達しているケースが多く、親密な関係性を形成する日本語力に優れていると述べている。

しかし、日本語のプロフィシエンシーをOPIで測る際、日本語のオーセンティシティや主体性に関する議論が不十分であると思われる。特に人、モノ、コトの動態性が高まり一人一人の言語の境界線が流動化した現在において、何をもちてオーセンティックとするか、主体的な言語選択や言語使用をどこまで評価するかといった点においては十分に議論する必要がある。また、継承語話者の多くは、自分たちの日本語はオーセンティックではなく、日本本国の人たちが使っているように、正しい日本語を使えないと自信のなさを感じている。

本発表では現在構築中の日本語継承語話者コーパス(JHLコーパス)をデータとして日本語継承語話者（複言語話者）としての日本語使用者のことばの使用をJFLとしての日本語学習者と、ASD（自閉スペクトラム症）との対比において検討する。その検討をもとにOPIにおいて留意する点を述べ、今後の日本語プロフィシエンシー（教育）研究のあり方について問題提起を行う。

2 JHL コーパスからみた JFL との日本語使用の異なり

2.1 JH の言語使用

発表者は 2015 年から南米地域を中心に継承語としての日本語使用者の自然会話データを収集し、コーパス開発を行っている（日本語継承語(JHL)コーパス）。自然会話データ、共通課題でのバイリンガルデータ、インタビューデータなどを収集している。収集した JHL の自然会話例を[1]-[3]に示す。

[1] ナオミ：あたしがママにむかえにいってー、ま、家につくーま、portoがあいてー（ナオミが隣にいた女性に“porto て門?” 女性：うん）ま、門があいてた途中に、ま、上にあが、ちょっと、さか、さかになってる（坂？うん）坂があるんだよね。でそやって、あがって、ぜんぜん前見えないんだよね。でー、降りた瞬間にー、もう犬の足の上ののっかって車がぼーんてなったんだ。もうすごいキャンキャンキャンの音しか聞こえなくて。うち三匹犬おるから。もう、気づいたら犬こっち隣走ってー逃げてーもう、あー血だらけでー血まみれでーもう、もううちの犬し、し、死ぬと思って。で、で、まあ、おねえちゃんから「ちゃんと駐車場しよう」って言われて、ちゃんと駐車場して、さささと走っていったら

（日系 3 世姉妹、20 代パラグアイ）

[2] サトル：あ、今日、今日、久しぶりにあの、ヒカキンみてー、youtuber、は、お金、何使うの、とかっていう話とかしてたね。ま youtuber って基本お金もちだから

ユウイチ：げすいねー

サトル：まあ確かに。だけど、まあ、Yoみて、それ、そうやってどんびきしようかなって思ったんだけど

（日系 3 世、20 代ボリビア）

[3] TA: Pira, pero no pesaba cincuenta kilogramos, no? [ピラだったけど、50 キロじゃなかった、でしょう?]

BY: No. だからあれは、ええ、何週間前しょ。二週間くらいか。

TA: じゅんちゃん lo había sacado [取り出していた]。 Pero eso fué... [でもそれは]

[中略]

YT : バラバラというかでも、pero hasta Victor dice que trajo boga [でもビクトルまでもがボガを釣ったんだって]。Boga 二匹釣ったて。

BY : Victor、ちょっとだけ boga が入とった。

(略)

BY : 原さんが、George に電話して、それからだよね。朝一番で、〇〇くんがもう行きよったもんね。神父のあれ、時間、あれ、ミサあげるの。

YT : Ya.はい。

BY : だからそれを取るのに電話したんだよ。だから Victor もおるで、「いー?! めずらしさー」て思ったけどよ。

（日系 2 世・40 代ボリビア 4 名。ロング(2019)より）

2.2 方言（ウチのことば）の使用

JHL 同士の言語使用データからは様々な日本語使用特性が見えるが、その一つに日本語の方言の適切な使用がある。下線部は方言形式である。[1]では「うち 3 匹犬おるから」[3]では「入とった」「めずらしさー」などの方言使用が見られた。[1]はパラグアイのイグアスーエステ地区、[2]はボリビアのサン

フアン地区だが、いずれも西日本出身者が多い移住地でこれらの方言の影響は、家庭や移住地コミュニティでの言語接触の影響とみられる（ロング 2019）。

方言使用というのは、日本語のオーセンティシティの一つの指標ではないかと考える。松本(2017)は ASD 児に方言使用が見られないことを明らかにした上で、その原因について調査分析を行っている。通常、人は成長するにつれ、状況や相手にあわせて複数のことばを使い分けるようになる。家庭で兄弟や父母と話す時と、同級生に対することばと、先生に対することば遣いを使い分けるようになる（松本前掲）。これは、社会性・関係性の意識形成、領域意識の発達により、公的な場面と私的な場面でのことばを使い分け、方言が一つのことばのレパートリーに変化していくことを意味する。

表 2 は ASD と TD 言語学習の異なりを対比した表に、JHL と JFL を加えたものである。共同注意とは、二者が共通の興味の対象へ注目するように調整すること、意図理解に基づく模倣とは、相手がおこなった行為の意図を理解し、模倣することである。真似のように外からみえる行為やことばを物理的にコピーしようとするのではなく、その行為が何に対してどのような意図でおこなわれたかなど、その人の心の状態を読み取って模倣する行為である。自己化とは人をそれぞれに特徴をもった個人として捉えられるようになり、その人らしいみぶりやことばづかいの模倣が可能になってくること。その人の心的状態、考え方の特徴の把握ができていく。ごっこあそびに「奥さまらしさ」「店員さんらしさ」といったキャラの演じ分けができる状態である。ASD は意図理解に基づく言語学習ができないため、メディアや組織的学習による言語学習は可能だが、周囲の人々が話すことばの中からことばを身に着けることが困難であると述べている（松本前掲）。

表 2：松本（2018：168）を改編（下線部は筆者が追加）

			TD（定型発達）	JHL（継承語話者）	ASD（自閉スペクトラム症）	JFL（日本語学習者）
家族のことばからの学習（方言）	意図読み 意図理解	共同注意	○	○	×	△
		意図理解に基づく模倣	○	○	×	△
		自己化	○	○	×	△
メディア・組織的学習	意図理解なしの模倣	意図理解なしの模倣	○	○	○	○
		連合（組織）学習	○	○	○	◎

この結果は JHL と JFL の対比においても有効な視座を提供する。JFL は日本語教材といった連合学習やメディアによって提示される日本語資源を傍観者的に見て模倣することで日本語を習得するが、ホームステイや留学などの当事者性をもった言語接触がない場合、そうした関係性の中での日本語学習を行うことが難しい。また、日本語のバリエーションに接触し、社会関係の中で使い分けていく経験を持つことも難しい。JFL は標準語—敬語、インフォーマルなスピーチスタイルというものについては日本語教材からのインプットがあり、理解することができるが、親子や親密な友人といった関係性の中にあることばをレパートリーとして使いこなせるようになるのは非常に難しい。一方 JHL は模倣の対象と

なる人物（親や兄弟）がおり、その人物とのやりとりの中から意味のあるものを見出して学習していく（坂本 2019）。そして家庭内での相互行為を通じて、自分自身のことばを獲得していく。そのため、その家庭内での相互行為の中で獲得された「私のことば」が方言使用に表れているのではないだろうか。

2.2.2 オーセンシティティからみた JHL の日本語

[1]-[3]のそれぞれの日本語使用を見る際、いくつか OPI の点からみると、プロフィシエンシーが低いと判定される点がある。[1]は助詞やテンスの使用で文法的に不正確であり、[3]はスペイン語が混在しておりピジン的な複層性が見られる。[2]の日本語使用は若者の日本語として非常に自然と思われるが、自称詞はスペイン語の Yo である（スペイン語の使用部分に二重線）。

しかし、彼らの日本語使用は筆者が接している JFL 日本語学習者の日本語使用とは異なっている。その差は「主体的な言語使用」の意識の異なり、つまりオーセンシティティの差ではないかと考える。例えば[2]の話者に筆者は日本語の自称詞を使わない理由を尋ねると「「ぼく」も「私」も「俺」も自分とは違う感じがするから。」と答えた。[3]においても、スペイン語と日本語のレパートリーを共有しているのであれば、混ぜた日本語を使用することがむしろ自然である。そして、その「混ぜ方」もランダムなものではなく、ドメインや相手の発話を受けた直後は言語を合わせるなど、規則性があるようである。何より、彼らの日本語部分だけに着目すれば日本語における文法的な誤りは特に見られない。[1]においても不自然さは見られるが、「ママ」「おねえちゃん」「あたし」「うち」などの代名詞の使用の使い分け、そして「おねえちゃんにいわれて」といった受身使用は非常に自然である。彼らにとってこれらのことば遣いは（正しさや規範には紐づいていなくても）主体的に選択することばなのではないだろうか。

[1] あたしがママにむかえにいってー、(略) 門があいてた途中に (略) おねえちゃんから「ちゃんと駐車場しよう」って言われて、

[2] サトル：まあ確かに。だけど、まあ、Yoみて、それ、そうやってどんびきしようかなって思ったんだけど

[3] バラバラというかでも、pero hasta Victor dice que trajó boga [でもビクトルまでもがボガを釣ったんだって]。Boga 二匹釣ったて。

4 まとめ：オーセンシティティからみた OPI の課題

ACTFL-OPI は汎言語的なガイドラインであり、英語、日本語を含む約 80 言語で実施可能である (The ACTFL Proficiency Guidelines 2012)。OPI は初対面会話であり、ロールプレイや逆質問もあるが、テストのインタビューによってすすめられる受動的な形式であり、被験者の十分な産出の証拠を集めるために、また欧米のインタビュースタイルに則って行われるために傾聴的態度をとらなければならない。

そして、初対面会話であるため、インフォーマルで親密なやりとりの熟達度をみることは容易ではない。超級のガイドラインには「フォーマル、インフォーマルなど異なった状況に対して、適切な称号・人称などを使って呼びかけることができ、多少話し方を使い分けることができる。」という記述があるが、ロールプレイでは方言を含め、多様で自然なキャラの使い分けを見ることができない。日本語は関係性に応じたふさわしさの調整に関する言語力の高低がプロフィシエンシーに大きくかかわっている（松田 2018）ため、こうしたふさわしさの能力評価を強化することで、JHL（日本語モノリンガルも含

め) と JFL の日本語プロフィシエンシーの差を測ることができるのではないだろうか。

更に、現状の OPI では複数の言語を混ぜて話すようなケースにおいて、それが日本語のプロフィシエンシーとして高いのか低いのかを評価することが難しい。中国語と日本語のレパートリーを共有している人のためのプロフィシエンシーとオーセンティシティなど、言語の多様性を前提とした汎言語的な言語能力アセスメントは今後ニーズがあがってくるのではないだろうか。

「セカイの日本語～みんなの声～」というプロジェクトがカナダ日本語教育振興協会とヨーロッパ日本語教師会が協働で行われている (<https://globalnetworkproject.wixsite.com/main/blank>)。本プロジェクトの目的は日本語によるコミュニケーションにおいて、これまで当たり前につえられてきた母語話者を中心とした一元的な言語観に疑問を投げかけ、日本語や日本語による言語活動の多様性に対する柔軟な理解を育成・促進することにある (WEB サイトより)。差異や違いに対する寛容性の育成ということが日本語教育においても重要視され、そのことが海外の日本語教育ネットワークから提起されていることが興味深い。

日本語に限らず、OPI が真に汎言語的なことばの力を測るなら、モノリンガルを想定した、モノリンガルテスターによるプロフィシエンシーテストだけでなく、複言語話者を想定した複言語話者による Translanguaging (García & Wei 2014) なプロフィシエンシーアセスメントのあり方も志向されるとよいのではないだろうか。現代の社会は、多くの人は 1 言語の使用者ということではなく、方言も含め、2～3 つ以上のことばのレパートリーを持っている。筆者は、JHL のことばの多様性を発信することで、どういったレパートリーをもつ日本語使用者のコミュニケーションがありえるか、その人たちはそのことばによって何ができるのかという、ことばの多様性を拓く視点に寄与するアセスメントガイドラインを作成したい。

付記：本稿は JSPS 科研費 (16H05676) の助成を受けています。

参考文献

松田真希子(2018)「ふさわしさの文法—日本語複言語話者の日本語使用から見えること—」『2018 年度日本語文法学会予稿集』

坂本光代(2019)「バイリンガル・マルチリンガルの継承語習得」『親と子をつなぐ継承語教育』 pp.15-25. くろしお出版

松本敏治(2017)『自閉症は津軽弁を話さない』 福村出版

ロング・ダニエル(2019)「ボリビア、パラグアイ日系調査から得られた知見—複言語状況と混合言語に注目して—」 EJHIB2019 発表資料 PPT, ブラジル・ジャパンハウス

García, O., & Wei, L. (2014). *Translanguaging. Language, Bilingualism and Education*. London, England: Palgrave Macmillan.